

市が洞小校区共生ステーションにおける文化財の展示について



知っていますか？

「ほとぎのさと」

今から1300年ほど前の飛鳥時代に「須恵器」という焼き物を作っていた窯がありました。その窯跡、丁子田1号窯、市ヶ洞1号窯から「瓮」

「瓮五十戸」などと刻まれた須恵器がみつかりました。「瓮」とは、壺のような器を指す言葉と考えられています。「五十戸」とは、昔の法律「大宝律令」で50戸をひとつの集まりとして「さと」と呼んだものです。

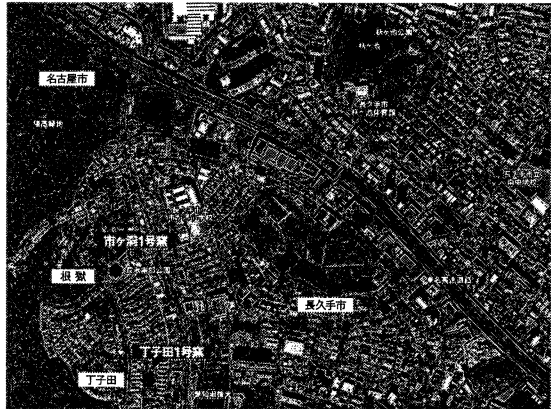
市ヶ洞や丁子田のあたりは昔むかし、須恵器の器を作る人たちの集まりという意味の「ほとぎのさと」だったようです。



市指定文化財写真「瓮五十戸佐加之」

瓮五十戸佐加之

サト名「サト」  
人名  
佐加之  
人名  
ほとぎのさと  
さかし



航空写真

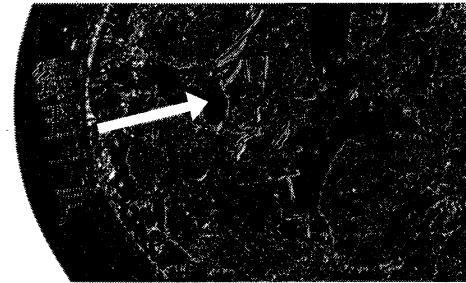


長湫南部公園

丁子田1号窯、市ヶ洞1号窯のあった場所は今は住宅地になっており、市ヶ洞1号窯のあったあたりは長湫南部公園になっています。

# 長久手と飛鳥のつながり

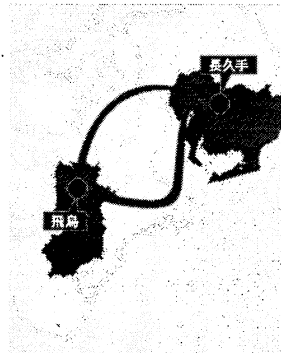
奈良県明日香村の石神遺跡という飛鳥時代の  
都で見つかった壺に「瓮五十戸」と刻まれたものが  
ありました。長久手で見つかった「瓮五十戸」と  
同じ文字が刻まれていることから、ここ、長久手  
で作られた器が税として都に運ばれていたと  
考えられます。



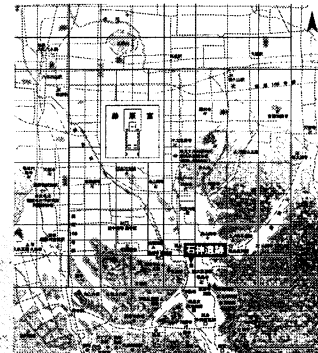
石神遺跡出土 底にほとぎの文字 写真提供:奈良文化財研究所

石神遺跡は、7世紀中頃の斉明天皇の時代から  
8世紀初めにかけての藤原京の時代まで、4期に  
分けて何度か改造しながら営まれてきたもので、朝廷の迎賓館や役所として使われていた場所と  
考えられています。「瓮五十戸」と刻まれた壺は、藤原京の直前及び藤原京の時期の遺構から  
出土しています。(およそ7世紀末頃から8世紀初め頃まで)

長久手市から石神遺跡までは  
直線距離でもおよそ130kmあり  
ます。そんなに遠くまでどうやって  
器を運んだのでしょうか。一説  
では、川を下るなどして、熟田の  
辺りから海に出て、伊勢の方へ  
渡り、そこから陸地を運んで  
いったといわれています。



伊勢崎周辺図



石神遺跡の位置図 図解提供:奈良文化財研究所

# 丁子田1号窯と市ケ洞1号窯

丁子田1号窯と市ケ洞1号窯は、長久手市内で確認されている最も古い窯跡です。使われていたのは飛鳥時代(7世紀後半)です。

丁子田・市ケ洞の窯跡の現地調査は、平成16年7月から平成17年2月まで行われました。

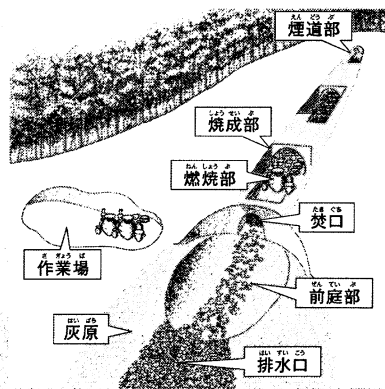


丁子田1号窯全景



発掘風景

丁子田1号窯は、全長11m、幅は一番広いところで2mありました。市ケ洞1号窯は、全長10mを超えると推測されますが、長い年月の間に遺構が失われ、残っていたのは、長さ4.4m、幅1.6mほどでした。窯は山の斜面を利用して作られており、下の方で薪を燃やして窯の中を高い温度にして、上の方で器を焼きます。一番上からはきつと煙が立ち上っていたことでしょう。



窯構造図

## 出土した須恵器

出土した須恵器のうち、へらなどで器の表面に文字などが刻まれたものを「刻銘須恵器」といいます。

丁子田1号窯、市ヶ洞1号窯から出土したものは、器を焼く前に文字がへらで書かれていました。壺や甕の頸や、脚などに刻まれた文字は、右から左へ横向きに書かれています。文字の内容は、作られた場所(サトの名前)と作った人の名前と考えられます。

このことから、およそ1300年前、この辺りは「瓮五十戸」と呼ばれた場所で、都へ運ぶための器を作る人たちが住む里だったことがわかります。

長久手の歴史を知る上でとても貴重な資料であり、指定文化財として保存していく必要があるため、平成25年1月31日、刻銘須恵器10点を市の有形文化財に指定しました。

この他にも、高さが117.5cmもある大甕など、いろいろな須恵器がたくさん出土しています。



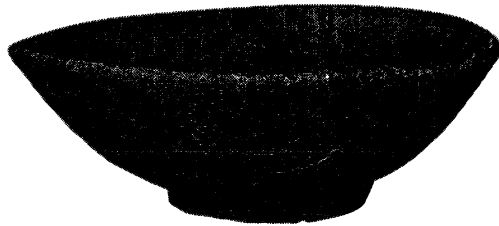
市指定文化財刻銘須恵器



出土須恵器

# 長久手の古窯

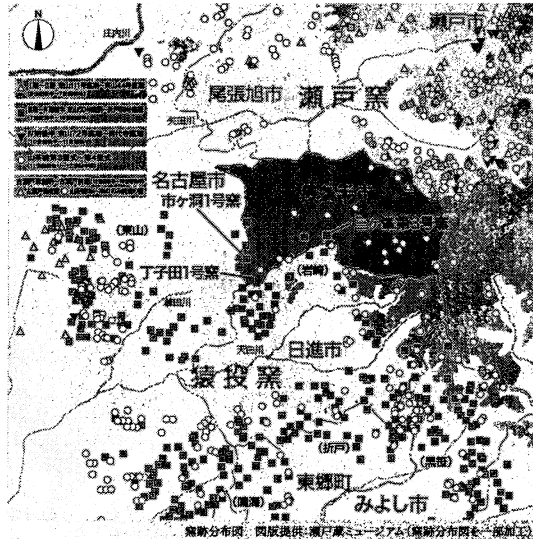
ながくてし、ようぎょうちくぶん、こくない  
長久手市は、窯業地区分という国内でも  
さいだいきゆう、すえき、せいさんち、さなげやま  
最大級の須恵器の生産地だった「猿投山  
せいなんろく、こようせきぐん、つうしやう、さなげやう、ぞく  
西南麓古窯跡群」(通称「猿投窯」)に属  
しています。



山茶碗

せいき、なごころ  
猿投窯は、5世紀の中頃に須恵器の生産  
がはじまり、7世紀後半には日本最大級の  
須恵器生産地となり、これまでに1000基  
以上の窯跡が確認されています。その後、  
やまぢやわん、へいあんじだいお  
14世紀に山茶碗(平安時代終わり頃から  
むらまち、とうかい、ちほう  
室町時代にかけて東海地方で作られて  
いた器)の生産を終えるまで、およそ900年  
の間生産を続けてきました。瀬戸、美濃、常滑  
とうじき、さんぎやう、はっでん、いしずえ  
といった陶磁器産業の発展の礎となった  
窯跡なのです。

はんい、とうざい、なごやしとうぶ  
猿投窯の範囲は、東西は名古屋市東部  
とよた、なんぼく、とうかい、おおふ  
から豊田市、南北は瀬戸市、大府市までに  
またがっています。



窯跡分布図：図説提供：瀬戸窯ミュージアム(窯跡分布図を一部加工)